

新著紹介

ヘーメ黎明

征矢野晃雄譯

ヤコーブ、ヘーメは知らるゝ如く十七世紀初期の Theosopher である。彼以後恐く彼の如く偉大なる純粹なる Theosopher は見出されなかつたであらう。Theosophie は宗教的體驗と哲學的思索との抱擁である。或は體驗によつて自己に證せられたる神自身の哲學的發展とも換言せられ得るであらう。なれば Theosopher には宗教的體驗と哲學的思辨力とが要求されねばならぬ。ヘーメはこの兩方面を具備する點に於て稀に見るの人であつた。彼は生來豊富なる直觀と想像力とに恵まれて居つて、幼少の頃より神秘的經驗に遭遇したことは屢々であつた。彼が思辨に興味を持つて居つたといふことに關しては、彼が偶々無學なる一靴工であつたといふことが吾々に反對の暗示を與へるやうであるけれども、彼が青年の頃より好んで激烈なる宗教的論争を試み、それが爲に雇主より解雇されたことがあつたといふやうな事に徴しても、推測するに難くはない。のみならず一度彼の書、*ノルン*に後年のもの、を編く時は何人とも彼の思索の深き *ノルン*、組織的なる *ノルン* に驚かざるゝであらう。彼の Theosophie 若しくは、形而上學の骨子をいふべき聖三、並に、宇宙の辯證論的開展の如きはいかにも近代の暗示に富めるものであつて、彼を近世獨逸哲學の先驅者としてヘーゲルもともに彼に捧げるに、Philosophus Teutonicus の稱號

を以てするに十分なるものがある。もとより彼には中世基督學、藝術等の影響、又は、彼獨特の象徴、直觀、類推等が混入して素朴、附會、難解なる點が決して尠くはないけれども、これ等はむしろ彼の Theosophie の殘滓として排棄するべきものであつて、往々なざるゝ如くこれによつて彼の Theosophie を本質的に評價することはできないであらう。

私に取つてはヘーメは最も親しいもの、一つである。彼を読むとき私はそれを私自身の最奥の自己の尊き聲を聴いて聽くことが出来る。ヘーメのものが國語に翻譯されたといふことはなれば私に取つては限りなき歡びであらねばならぬ。アッローラは彼が彼の宗教生活に一轉機を齎した一六〇〇年の體驗を十二年の間聖胎に養ひ來り、不可抗なる內面的生誕力に動かされて一六一二年に分娩したる光明の子である。本書の内容は一六〇〇年の彼の體驗内容を語つて居る次の彼の記録によつても推知するべき筈である

“.....a gate was opened unto me so that in a quarter of an hour, I saw and learnt more than if I had studied many years in some university; for I perceived and recognized the Being of all beings, the Byss and the Abyss; also the birth of the Holy Trinity, the descent and origin of this world and of all creatures, through the Divine Wisdom. I discovered also within myself the three worlds, namely, (1) the divine, angelical or paradisaical; then (2) the dark world, as the original of nature to the fire; and of (3) this external visible world, as a procreation or external birth, or

as a substance manifested forth out of both inner and spiritual worlds. I saw and understood the whole nature of good and of evil, their origin and mutual relation, and what constitutes the womb of the genetrix."

アウローラの原文には意味の難解なる個處が数くないのみならず、文典を無視した文章、綴字の誤れる字、彼特有の用語等があつて、翻譯は譯者自身もいばるゝ如く「實に容易ならぬ事業」である。私は今この譯書を原文に對照して見るの餘裕を持たなかつたために、譯者の微細なる苦心に同情し得ないのを遺憾とばするけれども、兎に角かゝる難事業を試みられたことに對して決して感謝の辭を惜しむことはできぬ。私はこの邦譯の成つたのを機會に體験と思索との溶融せる意味深き書として本書を宗教界並に哲學界に推奨し、譯者の所謂「砂中に金を求める」といふよりはむしろ金中の砂を振りすてる勞力と喜びを分ちたいと思ふ。

本譯書の卷頭には譯者の「ペーメに就て」があつてペーメの傳と彼の神智學體系とが略述され、卷尾には附録として本文に關する譯者の附註があつて本書を読む際の參考に供せられて居る。發行所、東京大村書店、定價金四圓。(久松)

三論宗綱要

文學博士 前田慧雲著

本書は學界の泰斗前田博士が會つて京都本願寺大學林に於て講説されし筆録である、其の叙述講説の叮嚀なる實に學徒を啓發せれば止まぬ親切さが籠つて居る、特に専門的學究に偏らずして而

も亦博士の獨創的卓見が全篇に漲つて居る。

此種の雄篇が陸續と世に出て、學界並に社會を裨益せむことを翹望して止まぬのである。

以下其内容の概要を紹介せん。

序 篇

講義の方法及組織。歴史の必要。三論玄義の參考書。

本 篇

第一章 三論の沿革

第一節 印度

第二節 支那

第三節 日本

第二章 立宗の綱格

第一節 總論

第二節 二藏三輪

第三節 三時教判

第三章 教理の綱要

第一節 破邪顯正

第二項 破顯大旨

第三項 破顯準則

第二節 所破宗計

第二項 眞俗二諦

第一項 總述

第二項 約教二諦

第三項 約理二諦